

KOSHINETSU

「混植」「アイガモ農法」で 伝えたかったのは食＝命

「食は他の命が支えてる」。それを伝えるには、普段の営農、等身大の自分を見せるだけで十分だった。

甲信越 のハナシ



作物の相性に感動

標高3000級の峰が連なる北アルプス中央部。その東側に広がる盆地の畑の一角は8月上旬、荒れているわけではないのに他の畑と違って作物がうつそうと茂っていた。よく見るとトマトとバジル、トウモロコシとインゲンが寄り添うように実をつけ、争うようにして草丈を伸ばしていた。

長野県安曇野市で、自然環境に配慮した農法を追求しながら消費者交流を推進する30、40代の農家の集まり「バジルクラブ」の鈴木達也さん。畑は鈴木さんが今年度の教育ファーム活動で、異なる作物を一緒に植え、それぞれの特性で農薬の使用量を抑えつつ生育を促進することができる「混植」したものであった。トマト

とバジルと一緒に植えると、バジルの香り成分が作用してトマトに害虫がつきにくくなる。

鈴木さんは埼玉県出身で長野県内の大学で専攻したバイオテクノロジー関係企業に一時身を置いた後、12年ほど前に就農。アイガモ農法で水稲2籾、小麦や大豆、トマトなど畑1畝を耕し、アイガモ200羽を飼う。

食は命に支えられているの思いを強く持ち、自身も普段から混植を実践。春にトマトの畝(つね)間に冬小麦を連まきする。トマトが生育する間、勢よく草丈を伸ばす小麦が雑草を抑え、トマトが収穫を迎えるころ、枯れて倒れて土中の適度な湿度を保ったり、微生物が活発に活動できるように日よけの役割を果たしている。

教育ファーム活動では12アアのは場で混植をはじめ、水稲のアイガモ農法やアイガモの調理、藍染め体験などを行った。5月～11月までのほぼ毎月1回週末に行い、地元子供会の幼児から中学生までの親子40人が参加した。

畑では10品目以上を植えた。ナスと枝豆、カボチャとトウガラシなども混植した。夏の収穫では、子どもたちが両手で葉をかき分けて、「宝探し」のようにトマトやズッキーナなども取り取った。何が植わっているのか分からないような状態の畑だが、立派に実った野菜を見て、ある親は自然の理にかなうよう工夫されている栽培技術に「プロの技」と驚く一方、「生き物が助け合っていて生きていることを実感した」



実りの秋に、もうひとつの「ありがとう」

「アイガモで 重く垂れ下がる稲穂かな」

活動の最後に子ども一人がこう俳句を詠んだ。田んぼでも、共生の姿を学んだ。親子はアイガモが害虫駆除など重要な役割を担っていることを知った。俳句は秋にしっかりと実り、穂が垂れる様子をアイガモに感謝しておじぎりする自身に重ねたのだが、「稲を守ってくれてありがとう」のほかに、「もうひとつのありがとう」があった。

役目を終えたアイガモを参加者自身がかしめ、解体し、薫製にして食べたのだ。

活動3回目。アイガモを食べることについて親子一緒に話した。「かわいそう」――冒頭、どこか他人事のような雰囲気だった会場は「野菜や魚は罪悪感がない。けど鳥は自由に空を飛び回るイメージで、鳥肉」とは違う「生はいいイメージで、死は悪いイメージ」死を考えると、生に気づくんじゃないか」と次第に議論を深めていった。子どもを想う親たちは「やった方がいい」「でもトラウマになるかも」と揺れた。

この日結論は出なかった。鈴木さんは「希望者だけ来てください」と告げた。

活動5回目の当日、集まったのは父2人、母2人、中学生3人、小学生1人。このうち父1人と、中学生1人が実際にカモを殺し、その後みんなで羽をむしって、解体した。その父は「ついに来た。やらなきゃ、という思いだった」、男子中学生は「チャレンジだった」と振り返った。

鈴木さんは「アイガモの場合は、



あつたかかったのが、冷たくなるということだった。食というのは命をもらうって自分を生かすということ。参加者みんながそれぞれに「ついでに、食と農に理解を深めてくれたと思う」と語った。

アイガモへの思いは活動の最後に歌になった。鈴木さんの知り合いの音楽家が作曲し、詞はみんなで作った。サビは「全ての命は、かたちを変えて、はぐらと、いっしょに、生きてゆく」と抜粋。

「食」は土から口に入るまで気持ちの循環があつてこそ

自身の普段の農法を通して、食と命の結びつきを伝えた鈴木さん。「農業はただの労働だといやになる。あの人に食べてもらえる、料理しておいしいと思ってもらえるからやる。そういう気持ちの循環も駆動力だ」

この春からは県の事業を活用し、受け入れ人数やメニューを拡大して教育ファーム活動を続けたいと考えている。特に、活動中、そして活動後の家庭での食のあり方を重視し、「参加する親が主導するような活動ができないか模索している」

全国の事例や教育ファームの活動に役立つ資料は教育ファームねっとをご覧ください。



農林水産省では、各農政局で教育ファームの推進をサポートしています。詳細は、お近くの農政局の窓口までお問い合わせください。

長野、山梨県の方は、関東農政局 消費・安全部消費生活課

〒330-9722 さいたま市中央区新都心 2-1 ☎048-740-0095

新潟県の方は、北陸農政局 消費・安全部消費生活課

〒920-8566 金沢市広坂 2-2-60 ☎076-263-2161 (内線 3717)

教育ファームに関心のある方、地域を盛り上げる次の一手をお探しの方農林漁業体験のポータルサイト「教育ファームねっと」に今すぐアクセス!!

教育ファームねっと

検索

「教育ファーム実践ファイル」(64種類)や「ワークシート」(235種類)も無料ダウンロード配信中!

事務局 農文協

〒107-8668 東京都港区赤坂 7-6-1
(E-mail) f-edufarm@mail.ruralnet.or.jp

各エリアの事例は日本農業新聞公式サイト「e農ネット」でご覧になれます。
<http://www.nougyou-shimbun.ne.jp/>

